
聖絶（ジェノサイドからの帰還）

藪 冬彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖絶（ジエノサイドからの帰還）

【Nコード】

N9358X

【作者名】

藪 冬彦

【あらすじ】

北海道のサバゲー愛好者が、定例戦に集まった美瑛の丘で遭遇した大地震。そして時空を超えてアフリカ中部のルワンダ共和国の地に立った18人。周辺は死体が散乱する大量虐殺の渦の中だった。やがて彼らは本物の銃を手に取り、生死を賭けて引き金を絞った。。。

夜 戦（前書き）

平和ボケした日本人に覚醒を促したい気持ちで創作しました。

夜戦

閃光が交錯していた。

M4アサルトライフルのフルオートトレーサーから放たれる蓄光B弾だった。

その光の饗宴に赤城誠は、しばしば我を忘れ見入っていた。

初秋の週末、サバイバルチームの定例戦でホームフィールドの美瑛の丘に彼は立っていた。

気温は10度を下回らず珍しく良好なコンディションの夜だった。

ゴーグルが荒い息で曇り始め視界が狭くなる。

数ゲームを消化し、深夜2時を過ぎようとしていた。

集まった仲間は18人。

もう10年以上を費やす大人達の遊びだった。

9人对9人フラッグ戦を決行する、敵味方ともフォーメーションは息がぴったりだった。

無線を介しながらお互いの位置を確認し、敵の殲滅を謀る。

ブッシュに身を隠し、しばしば訪れる静けさの中に電動ガンのリコイル音が静寂を破る。

突然、BB弾が耳元を掠めていった。

（おっと 危ねえ！）と赤城は唇を尖らせた。

「赤城さんの前方10メートルの木の下に2人居る・・・引き付けるから後ろに回りこんでくれ」

赤城のインカムに味方の誉田から無線が入った。

「OK！」

誉田のAK47がけたたましく唸り始めた。

敵も応戦する。

その間隙を衝いて赤城は匍匐前進を始めた。

何か違和感をおぼえた。

突然眩暈を感じたのだ。

地鳴りのような音が地中から押し寄せてきた。
そして地面が揺らぎ始めた。

(地震か!?)

方々から仲間の動揺の声が上がり始める。

「やばいぞ!地震だ」

「全員セーフティゾーンに戻れ!」と赤城が叫んだ。

揺れは激しさを増し出した。

横揺れから縦揺れになり立っていることも難しくなった。

「まずい 皆んなその場から動くな 危険だぞ!」

「収まるまで待つんだ」

赤城は這い蹲るようにその場に伏せていた。

5分ぐらい経っただろうか、とても長く感じた。

ようやく揺れも収まり出した。

立ち上がった赤城は、チーム全員全員の安否を確認するために声を上げた。

「すぐにセーフティまで集まってくれ」

ブッシュの中から次々と仲間が現れはじめた。

LEDライトのランタンの下に全員が集まった。

赤城は彼らを見回して安堵の溜息をついた。

「みんな怪我はないようだな よかった」

「そう云えば、今日は9月11日だよな」と誉田が呟いた。

あの東北大地震から6ヶ月が経っていた。

「今日はもうお開きにしよう お疲れさん!」

「おい 携帯が繋がらないぞ!」と誰かが叫んだ。

赤城は自分の携帯を開いた。

その時、足元の地面が崩れ始め地面が裂け始めた。

絶叫とともに全員が滑り落ち、地中深く飲み込まれていった。

つづく

夜 戦（後書き）

戦国自衛隊に少なからず影響を受けました。そしてちょっとグロ―バル化しました。

死 臭

鼻腔を突く異臭で彼らは目を覚ました。

そこは小高い丘の上だった。

いや丘ではなく、クレーターののような窪地の縁に男達は居たのだった。

一瞬、ごみ処理場に迷い込んだ錯覚に陥る。

しかし下から漂よい上がる異様な匂いの元を辿って見ると生ごみではなく、そこには褐色の人の死体が堆く積み上げていたのだった。

「おいなんだ　ありゃ？」

「死体だ」と冷静に赤城は答えた。

動揺する声とともに次々と男達は胃の中身を戻し始めた。

そして我に還った男達は、迷彩のバンダナを首から慌てて外し、口と鼻を覆った。

禿げ鷹が死体をついばみ始めると、唸りを上げて蠅が上空に舞い始める。

まさしく地獄の景観だった。

雲ひとつ無い空に、大きな太陽が地上のあらゆる水分を蒸発させよ

うと唸っていた。

「ここに居たらまずいぞ」

医師でもある赤城は、後ろに立ち尽くす仲間を見て叫んだ。

「出来るだけ早くここから退避するんだ」伝染病に感染する恐れと身の危険を感じた男は17人に声を掛けた。

彼らは、訳も分からないまま砂漠の丘陵地帯を徘徊し始めた。

「怪我をしている者は居ないか？」

全員の顔を見渡すが、大丈夫と云う頷きが返ってきた。

だが全員真っ青な顔で、不安で押し潰されそうになっているのが分かった。

「ここはどこなんですか？」誉田の震える声がした。

「分からん」赤城はそう答えるしかなかった。

つづく

異国の地

「ルワンダですよ 多分・・・」と後方から声が上がった。

驚いた男達は一斉に声の主を見た。

「今言ったの柳田さんですか？ 何故分かるんです？」と誉田が続けるように訊く。

「僕は学生の頃、海外青年協力隊の活動で中央アフリカへ1年間滞在しました」

「この景色や死体の状況からすると間違いなくここはルワンダ共和国だと思います」

（柳田さんは、旭川の工業高校の土木科の教師なんです）と誉田が赤城に囁いた。

「すると我々は遙か北海道から地球の反対側のアフリカにワープして来たという事なのか？柳田さん」と赤城が問い掛けた。

「ええ 10年も前の事ですが私の記憶が正しければ間違いないと呟いた。

それを聞いていた男達は信じられないのか、笑いだす者も現れた。

その時、一人の男が肩掛けしていたM4ライフルを不思議そうに見詰めている。

「どうした 阿部さん」と隣の男が声を掛けた。

「さっきからおかしいと思っていたんだが、なんか装備が重く感じないか？」

「それにこの電動ガン重すぎだよ 変だ」と言いながらセレクトレバーをセーフティからFULLに切り替えて、ダットサイトを覗き遠くに見える灌木を狙った。

引き金を絞る。

乾いた激発音が周囲の静けさを破った。

阿部と言う男が驚いた拍子に銃を投げ出し、右肩を摩りながらその場に尻もちをついていた。

何が起きたのか理解し難い状況に、全員の思考が固まった瞬間だった。

つづく

実弾

我に還った赤城は、直ぐに自分のアサルトライフルを肩がけのスリングから外した。

マガジンを確かめると、そこには鉛色の弾頭が鈍い光を放つのが見えた。

さらに右足のレッグホルスターから1911ガバメントを抜き出し、カートリッジをリリースした。

やはり9mmのパラメダル弾が収まっている。

その様子を見ていたチーム員全員が次々と自分の銃器を点検し始める。

赤城は人を探すようにチーム員を見回した。

「副島さん ちょっと来てくれませんか？」

現れたのは、旭川の現役陸上自衛隊員である副島省吾だった。

「トイガンが実銃になるとは、これは一体どうしたことでしょう？」

「さあ 私にも全く理解できませんが、間違いなく本物です」副島が人差し指と親指で5.56mmのNATO弾を抓んで見詰めている。

赤城はガバメントを50メートル先の小高い砂丘に向け引鉄を絞っ

た。

乾いた激発音とともにスライドが後退しカートリッジが輩出され弧を描きながら足元に落ちた。

50メートル先で砂塵が舞った。

それが文字通り引き金となり、全員が四方八方に銃弾を撃ち始める。

その時、赤城が大声を上げた。

「射撃を止めるんだ！中止しろ！」

「こちらは副島さんです。現役の前衛隊員です。実銃の取り扱いや注意点について話を聞こう」

一歩前に出た副島は、簡潔に銃の扱いについてライフルとハンドガンとに分けてレクチャーする。

銃の知識は各自それなりに持ち合わせているため、スムーズに講義は進んでいった。

そして横一列に並び再び射撃の練習を始める。

おもちゃを操るサバゲーチームが即興の傭兵部隊へと様変わりしたのである。

物凄い轟音が辺りを覆う。

誉田が手の痺れと耳鳴りに負けて、喉の渴きを潤すために腰のポーチのミネラルウォーターに手を伸ばした。

ふた口ほど飲みながら、何気なく陽炎が立つ遠い地平線に目をやった。

「赤城さん！車両がやって来ます」と誉田が叫んだ。

赤城も目を細めて言われた方向を確認しデジタル双眼鏡を取り出した。

地平線の彼方から砂埃をあげながら2台の車両が向かって来る。

時々フロントガラスに太陽光線が当たり反射している。

1台のジープを先頭にベンツのトラックが後続していた。

ジープには4人の兵士が乗っており、トラックの荷台には死体が無造作に積まれていた。

「全員 伏せるんだ なるべく身を隠すようにしろ！」

ライフルを構えた18人の男達は砂漠の真ん中で地面に伏せながら、とてつもない緊張感に包まれた。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9358x/>

聖絶（ジェノサイドからの帰還）

2011年12月3日13時52分発行